

紀 要

第10号

— 目 次 —

序	
縄文時代石器研究の方法論序説	(鈴木 康 二)
弥生社会からみた独鈷石	(田井中 洋介)
犬上川左岸扇状地における考古学的研究	(近江歴史クラブ)
犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳群について	(北 原 治)
近江における階段式石室の検討	(堀 真 人)
犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室	(辻 川 哲 朗)
古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について	(山中 由 紀 子)
犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について	(中 村 智 孝)
犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観	(畑 中 英 二)
東大寺水沼荘の開発	(神 保 忠 宏・畑 中 英 二)
「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察	(重 岡 卓)
古代王権論にむけて	(細 川 修 平)
日野町出土の瓦器碗をめぐって	(土 垣 幸 徳)
滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境	
井口城とその立地	(神 保 忠 宏)
水と環境教育	(佐 野 静 代)

1997. 3

(財)滋賀県文化財保護協会

滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境

本稿は滋賀県伊香郡高月町井口における水利を中心に調査研究である。神保忠宏（滋賀県立安土城考古博物館学芸員）と佐野静代（奈良女子大学地理学研究室助手）は、中近世の水利資料がよく残り、また戦国時代に浅井氏の家臣として当地を支配した

井口氏の根拠である高月町井口を選び、1996年11月に共同で現地調査を行った。なお現地では高月町立観音の里歴史民俗資料館の佐々木悦也学芸員と高月町史編纂委員の宮澤義夫氏に多くのご助言とご配慮をいただきました。心よりお礼申し上げます

井口城とその立地

神保忠宏

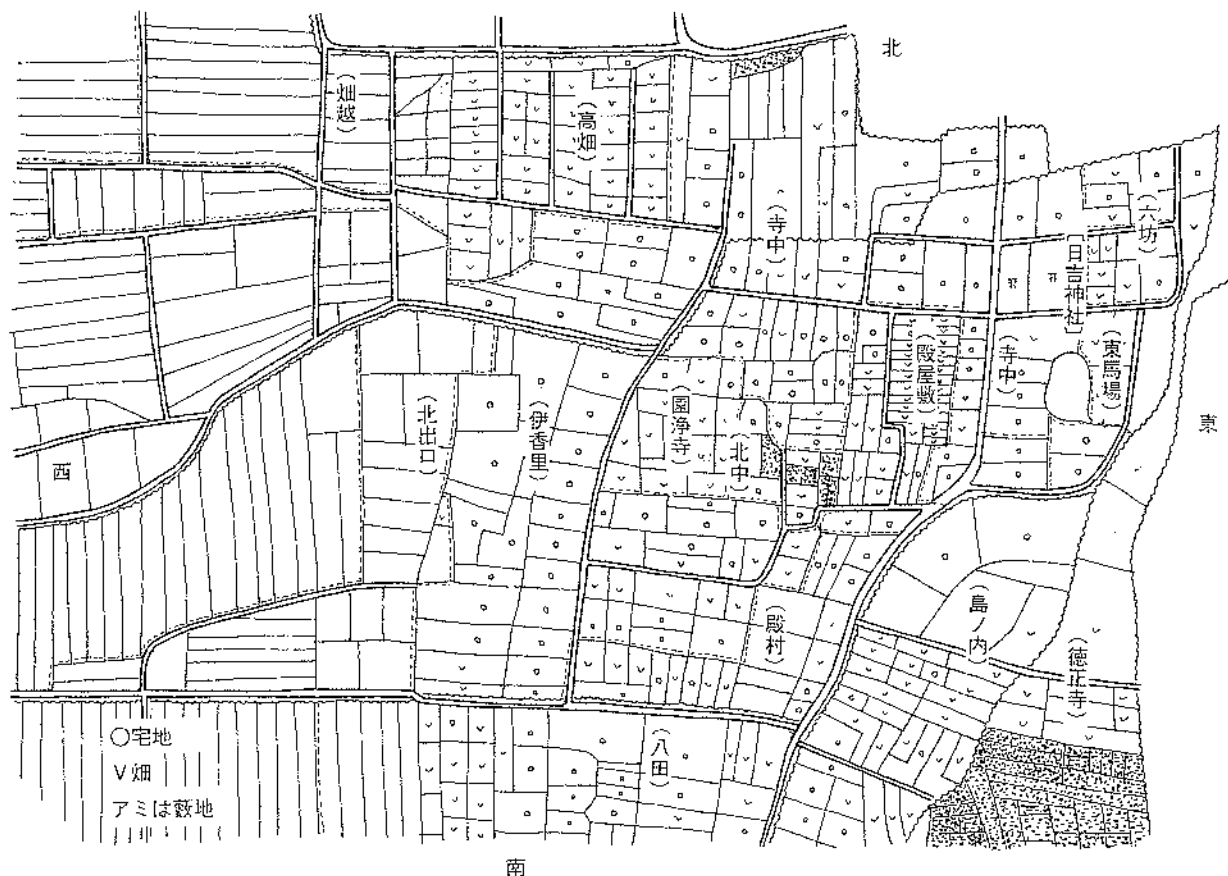
はじめに

平野部に分布する城館遺構に関する研究は、古くは谷岡武雄等によって愛知川中・下流域に分布する城館の分析が行われた。その立地には、軍事的要因に加えて土地開発、しかも荘園制が変化してその再編成の中心となったものが多いと指摘している¹⁾。また中井均は城館遺構の堀に注目し、防御機能に加えて水利灌漑の可能性を指摘し、開発行為に関連した機能も有していたと述べている²⁾。

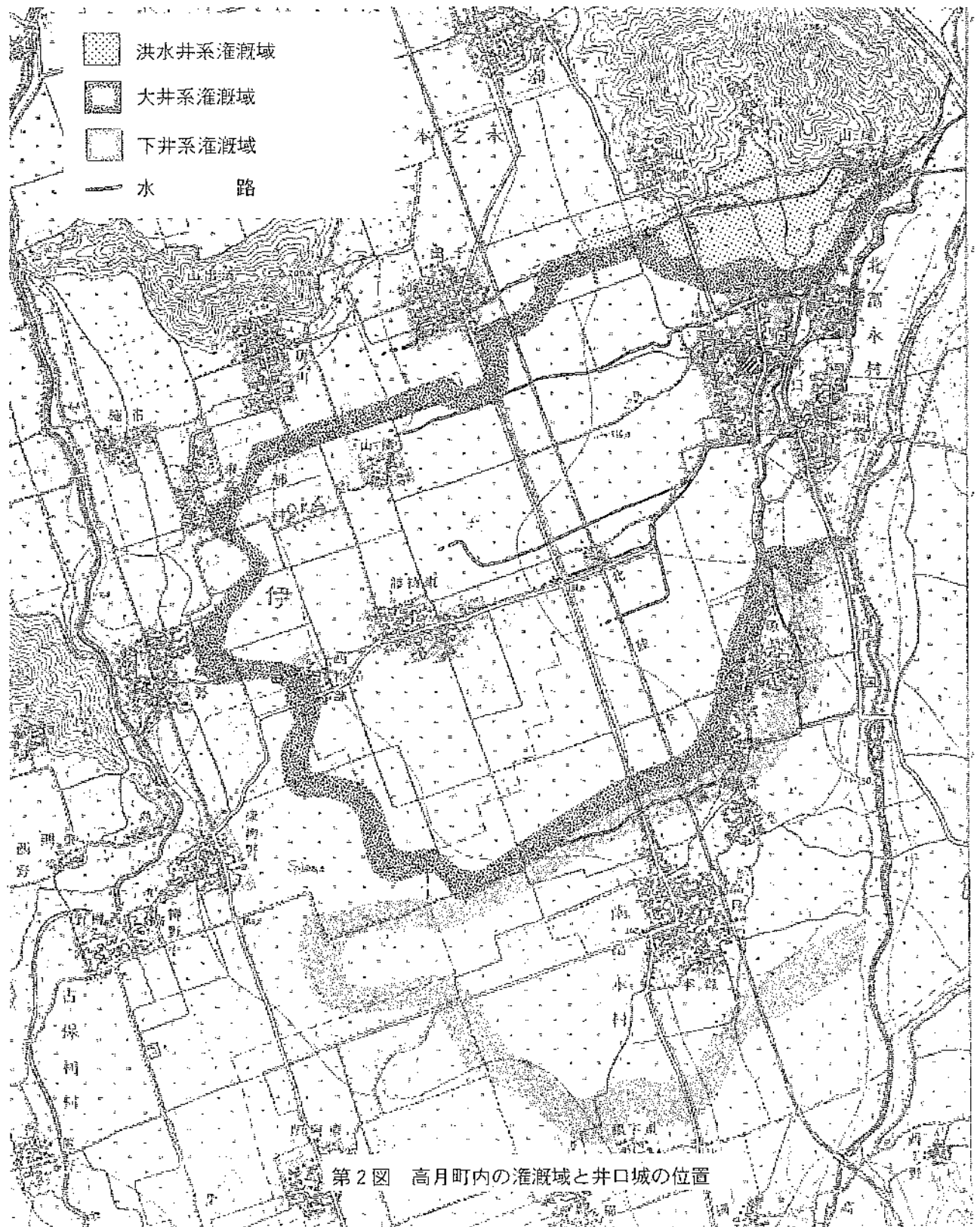
筆者もまた中世城館が防御機能にとどまらず、開

発行為または耕地経営に一定の機能を有していたと考えている。その発端は素朴で、1996年度秋季特別展出陳交渉において、中世城館を継承した居宅に来訪した際に、必ずといってよいほどその近辺に基幹となる灌漑水路が存在した点に関心があったためである³⁾。

そこでその素朴な関心から、高月町井口城を例にして中世城館の立地と水路の関係を具体的に調査してみたいと思う。なお部分的に佐野論考と重複する部分が存在するので、佐野論考にある図を用いて説



第1図 井口城周辺の地割



第2図 高月町内の灌漑域と井口城の位置

明する個所も存在する。

井口城について

井口城は当地の地頭職を勤めた井口弾正忠経元の居館といわれ、16世紀後半には江北の戦国大名である浅井氏の家臣をつとめていた。大規模な屋敷であったと思われるが、現在ではその跡をほとんどとどめず「殿屋敷」(現富永小学校敷地)、「殿村」,「東馬場」などの小字から城館の存在を推測するに過ぎない。平地の城館を復元する資料になる明治期の村絵図も、『滋賀県中世城郭分布調査』¹⁴⁾に所収の等級縮絵図(明治9年)はひずみが大きくそのままでは復元に適しない。そこで時代は下るがひずみの少ない明治中期の地籍図を基本として上記等級縮図の情報と現地調査¹⁵⁾の情報を加えて近世末期から明治初年の姿を推定し(第1図)、現行図と比較してみた(現行図は佐野論考図2を参照)。

現地調査では日吉神社北側に逆コの字型の土塁が残り、富永小学校西側にも土塁らしき高まりがある。明治時代の村絵図にもこの場所が藪地になっており、土塁だった可能性もある。ただしこの遺構が井口城に関係する確信が得られず、判断に苦慮するが現段階では可能性を指摘するにとどめたい。地割からの分析は先に指摘した藪地のみで、他は城館の痕跡を明確に示すものは認められなかった。現状では「殿屋敷」を中心にした城館が存在したと推定する以外判断はできないが、大きな間違いではないだろう。

井口の水利について

つぎに水路を見てみると、「殿屋敷」を囲むように細い水路が流れ、その周りには高時川右岸を灌漑する基幹水路が流れている。高月町内の水利は高時川系列と余呉川系列に分類され、高時川系列は高時川の扇状部にあたる地点から取水していた¹⁶⁾。そこから取水し井口集落を貫流する水路は「大井」もしくは

「下井」に属し¹⁷⁾、その灌漑範囲は系列の支流を含めて高月町の耕作域の多くを占めることになる(第2図および佐野論考図1参照)。その咽喉部に井口城が立地しているわけである。

この灌漑域は山門領荘園である富永荘の範囲におおよそ合致すると考えられ¹⁸⁾、井口城の位置が富永荘経営に関連性がある可能性は容易に推測できる。この水路開削と井口氏との関わりは次の先野論考を参照されるとして、その概要は富永荘を実際に経営する在地支配者である井口氏がその拠点として「殿屋敷」周辺に居館を築いた可能性が高い。

おわりにかえて

井口城のように、荘園の灌漑域を掌握する位置に城館を建設した事例は多いと予想される。今回はしかも大正時代の水利データをそのまま現状地形に投影するという単純な作業にとどまり、詳細な分析が行えなかった。事例を増やし今後の検討としたい。

註

- 1) 谷岡武雄、小林 博、日下雅義「愛知川中・下流域における中世の土地開発と豪族屋敷」歴史地理学研究会、1963年
- 2) 中井 均「中世城館の発生と展開」物質文化48号、物質文化研究会、1987年
- 3) 長浜市垣見氏宅(ただし水路の分水点は変化している)長浜市下坂氏宅、そして高月町富永小学校などである。
- 4) 『滋賀県中世城郭分布調査』9、伊香郡・東浅井郡の城、滋賀県教育委員会、1990年
- 5) 宮澤義夫氏のご教示による
- 6) 現在は高時川の合流井堰から取水している
- 7) 滋賀県内務部編『滋賀県農業水利及土地調査書』4、伊香郡1923年による。
- 8) 福田栄次郎「富永荘」、『講座 日本荘園史6』吉川弘文館、1993

編 集 後 記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があらうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成9年3月

紀 要 第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL:(0775-48-9780)
印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社
滋賀県長浜市森町中久保386